慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リチャード・N・オーウェンズ著 工企業の経営管理
Sub Title	
Author	森, 五郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.1 (1955. 1) ,p.80- 81
JaLC DOI	10.14991/001.19550101-0080
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550101-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

變數間の過去に於いては變化しなかつた條件としてのみ考察されてゐる。つまりこゝに於いては自律性といふ公準に就いては一言も觸れられて居ない樣に思はれるのである。次いで屢々政策樹立者は(1)と(2)の函數型を知悉してゐるといふ假定が用ひられて來た。この場合に於けるストラクチュアの關係式を如何にして政策者は知ることが出來るのであるか？　この問ひに對しマルシャツクは政策樹立者とテクニシアンと呼ばれるメトリシアンの分業を强調する。テクニシアンはストラクチュラルパラメタを測定し得るが、その政策決定に關するゲインファンクション（gain function）或は效用函數に就いては關與しないのである。この點に於いてもストラクチュアの認識過程に問題が殘されてゐる樣に思われる。

以上非確率模型に依つて政策と理論の關係からエコノメトリツクスの有用性を述べて來たが、エコノメトリツクスが現實の分析を意圖する限りその確率論的接近が不可缺のものとなるであらう。かくして七節確率攪亂要素と誤差（Random Schocks and Errors）に於いて確率模型に依るストラクチュラルエスティメイションの必要性を解明し、更に第九節動態模型に於いて經濟變數の時系列變化に言及するのである。

ここでは、この論文の特色と見られるストラクチュアの概念を中心に、マルシャツクの强調しようとした計量經濟學の實踐性を紹介した。計量經濟學方法論の急テンポに發展しつゝある現段階に於いて、この論文の意圖するメトリツクスの有用性に關する見界には興味深いものがある。エコノメトリツクスが現實の驅使する方法論的側面とは別に「その意圖する經濟理論の恒常的法則とは何か」といふ哲學的課題に直面してゐるからである。

（尾崎　巖）

リチャード・N・オーウェンズ著「工企業の經營管理」

（Richard N. Owens, Management of Industrial Enterprises, Revided ed. 1953. pp. 669.）

本書は Irwin 社の經營會計に關する叢書の一册であつて、專ら經營管理および經營工學專攻の學生用テキストとして書かれたものであるが、第二次大戰後におけるアメリカ工業經營の管理技術の大要を知るには適切な文獻の一つであるといえよう。

著者オーウェンズは、ヂョージ・ワシントン大學の經營管理の教授であつて、その立場はアメリカ經營學の一般的な流れとして、管理技術學的な傾向に立つていると見てよいが、しかしある程度制度學派的影響の下にあることも見逃し難いようである。すなわち本書は、その序文に指摘しているように、「工業の組織と管理の領域における最近の發達と前進とに應じる目的」をもつて管理の各部面の發達と最近（一九四〇年以後）における變化とを、「各種の產業から實例を引いて」明かにしようとしていると同時に、經營組織とそれの各管理部面の諸原則やそれに影響をあたえる諸要因などをも一應明かにしようと努めている。殊に本書は第一部「管理の發展」において、テーラー以來の管理の發展と Attempt to discover Natural Laws を論じて一先づ管理原則を明かにした上に立つて、一九二〇年以後における社會的經濟的諸制度の發展變化が management の上に如何に影響を與え、現在の Management at the Higher Levels を形成したかを指摘していることは、從來のアメリカ經營管理學が、とかく非歷史的平面的に各管理技術を叙述しているものが多いのに比べて、一つの意義をもつように思われる。

しかしながら、本書がこのような歷史的制度的方法を取り入れているにも拘らず、戰後のアメリカ經營學における制度學派的諸著が多く取り上げている基本問題の一つ、すなわち企業目的そのものが、從來の economic profit のみから進んで social objectives 或は social responsibility を含むものとして論じられる傾向が見られるのと對比すると、（例えば、William R. Spriegel, Principles of Business Organization and Operation. や Husley, Elements of Business Administration.）やはり本書は基本的には從來の管理技術論的立場に立つているものといえよう。

次に本書の內容構成であるが、本書は十部四十二章からなつており、第Ⅰ部、管理の發展、Ⅱ組織・リーダーシップ・モラール、Ⅲ設備と作業條件、Ⅳ製品、Ⅴ標準、Ⅵ賃金と刺戟、Ⅶインダストゥリアル・リレーションズ、Ⅷ調達と保管、Ⅸ生產統制、Ⅹ生產の財務的統制、である。すなわち部編成としては、從來の管理書と格別違いもないのであるが、しかし前述のように、本書は一九四〇年以後の新しい管理技術の概說に特に力を注いでいるのであつて、このことは本書が「取りわけ、經營管理上の關心を呼んだ諸問題には次のようなものがある」（三三頁）として、「新工場の立地、新製品の發達、新材料の發達、勞資合同委員會、產業への科學的適用のための調査研究、勞働力の機械による代替、作業條件の改善、人事諸問題への大きな關心、從業員相談、從業員訓練、職務評價、人事考課」をあげ、これらについては特に當該箇所でかなり詳細に叙述している。

最後に本書を讀んで理論的にもある程度參考となると考えられる若干の諸點を指摘して見よう。すなわち、それは必ずしも本書の獨創とはいえないとしても、第一に組織の概念をリーダーシップやモラールとの關係において把えていることであり、第二に Industrial Relations の部で取扱われている組合關係（Relations with Union）の中にかなり强く Human Relations 研究の影響が見られ、例えば「勞資の衝突の原因」の中に理解の缺如を强く指摘し、「理解の諸原則」を明かにしようとしていることである。また第三に、從來の「生產統制」に關する叙述が、多くは大量生產を中心に述べられているのに對して、管理原則の適用が比較的困難と見られる diversified production について、それの routing や scheduling などを稍々詳細に叙述している點などである。

これを要するに、本書は前述のように畢竟學生用テキストとして書かれたものであつて、そこからは理論的に格別高いものを求めることは出來ないが、しかし工業經營の全般にわたる各管理技術の最近の動きを概見するのにはある程度適した文獻の一つといえよう。

（森　五郎）